

# 北の文化

今日17日、モエレ沼公園のガラスのピラミッドに、故イサム・ノグチの彫刻「オンファロス」が姿をあらわした。石の上面からあふれ出る水が光り、パーカッション・スト・加藤訓子さんが奏でるマリンバの柔らかな音と共鳴した。居合わせた人々は、日頃のささいなことを忘れて「いい時間だなあ」と感じたと思う。

オンファロスは、日本庭園にある「蹲つまたい」である。彫刻家イサム・ノグチが札幌市のモエレ沼公園の設計に携わる縁結び役をした服部裕之さんに、イサムがプレゼントしたものだ。オンファロスは、ギリシャのデルファイにある「地球の臍へそ」という意味を持つ石をモチーフにしている。服部さんが当時、社長をしていたソフト会社がIT業界の中心になれ、という期待を込めたのだらう。イサムは「建物が無くなっても千年残りますよ」と言った。その彫刻が

## オンファロスとモエレ沼公園 齊藤 浩二 モエレ・ファン・クラブ 事務局長

ほっかいどう

服部さんから札幌市に寄贈されたのだ。

ガラスのピラミッドの頂点の真下の1階部分はそれまで何も無い空間だったが、まるでオンファロスのために空けておいたかのように作品はびったりと収まった。イサム・ノグチと親交があった彫刻家安田侃さんは「ガラスのピラミッドの真真ん中に置かれて、モエレに魂が入ったと思う」と語った。確かに今まで何もなかった場所に命が宿ったと感じる。外の公園では、自分の身体から空へ大地へと気持ちが広がっていくが、オンファロスを見ていると思考が身体を中心へと向かっていく。流れ落ちる水の音を聞きながら静かに



今日17日にお披露目されたオンファロス

## イサム・ノグチの思いをつなぐ

もの思う時間が持てそうだ。



イサムは1988年春、ごみ埋め立て地だったモエレ沼を、大地そのものを彫刻とするような公園に作りかえる仕事にとりかかったが、その年の暮れに急逝した。残された1枚の設計図と模型をたよりに、多くの人々の努力と創意によって公園は完成した。私は建築家の川村純一さんとともに、17年にわたる建設の舞台裏を「イサム・ノグチとモエレ沼公園」という本にまとめ先月、出版することができた。

過去を振り返るためではなく将来のために書いた本である。時間が経つにつれて自然も人も公園の使い方変わるだろう。だが、変えてはいけないことがあるはずだ。後の人がそれを判断するために、イサムの理念とは何だったのか、私たちは何を大事にしてここを作ったのかを残しておくべきだと思った。



モエレ沼公園を子どもたちの豊かな感性を育む場に、というイサムのメッセージを受け止めようと結成さ

れた「NPO法人モエレ沼公園の活用を考える会(モエレ・ファン・クラブ)」は、シンポジウムやアートイベント、子ども向けワークショップなどの活動を続けてきた。昨年から公園内の樹木の間伐を手伝い、その丸太からログドラムを作るなど、環境関連の活動へ幅を広げている。

だが、メンバーの多くは公園建設関係者やイサムのファンで、周りには近寄りにくいイメージを与えているらしい。実際にはそんなことはないのだが、10年経っても人の輪を広げるのが難しい。これからキーになるのはアートやデザインを志向する学生ら若者たちだろう。面白くて社会のためになることに関わりたいと思っている若者は多いはずだ。彼らとつながり、若者が主体となってモエレでなければできないことを共に考え実現させていきたい。その活動の中心にはきつとオンファロスが存在するだろう。これからモエレはもっと面白くなる。子供も大人も一緒になって楽しんでほしいと思う。

1947年、安平町生まれ。モエレ沼公園のランドスケープデザインを担当。